

カルイザワ芸術新聞
2018



新・創刊号

「共生の思想と緑陰の活用でアートな軽井沢を」

8月4日、FIACS 主催第4回まちづくり講演会および交流会開催@友愛山荘



軽井沢が向かうべき
近未来を語る

各界の要職にある別荘民で、軽井沢の将来に貢献したいとする仲間が集まって設立した国際文化都市整備機構 (FIACS)。同団体主催の講演会および交流会が8月4日に友愛山荘で開催された。4年目の今回は共生の思想と緑陰の価値を強調する報告が相次ぎ、多くの美術館にもメールを送る結果となった。町内では来年の選挙を意識しつつ様々な政策課題が議論され始めているが、次に向かうべき姿を考える上で大いに参考となりそうだ。

歴史・文化のこれから

FIACS 理事長・水野誠一氏 (元西武百貨店社長・元参議院議員) の主催者挨拶の後、FIACS 副会長・松平定知氏 (元 NHK) の講演が行われた。歴史を歯切れよく解説する同氏によって軽井沢の文化的価値が一層鮮明になった。

次いで登壇した FIACS 副理事長・増田宗昭氏 (CCC 社長) の講演は「軽井沢&東京、新しいライフスタイルの提案」。平安堂の閉鎖後、長らく書店のない状態が続いていた軽井沢であるが、今年 CCC によって『軽井沢書店』がオープンし一躍注目を集めることとなった。



同社のデータによると上記書店に集まるのはアウトレットモール同様、地元以上に県外、特に東京からが圧倒的に多く「軽井沢は東京の 24 番目の区であることがよく分かった」(増田氏) とのコメントが紹介された。「この流れで今度は森 (緑陰) の中に本格的な蔦屋書店をオープンしたい」(同氏) という力強い発言まで飛び出し、聴衆がどよめくシーンが見られた。

森と人で織り成す
共生の思想

続いて識者からの報告となり、まず FIACS 理事・團紀彦氏 (青学大教授・セゾン現代美術館理事) による「共生の思想と軽井沢における展開」が紹介された。セゾン現代美術館を中心とする千ヶ滝地区の将来は共生の思想に基づいて検討されるべきとの同氏の主張は、長らく停滞している同地区にとって一筋の光明になるに違いない。



次に登壇した泊三夫氏 (前博報堂顧問) の発表は、團氏による共生の思想を歴史的医学的な観点からフォローする「脳養地としての軽井沢」。さらに岡崎哲也氏 (松竹常務) の「エンタメ産業から見た軽井沢」は、増田氏が述べた緑陰の価値がエンタメ分野にも貴重であることを論じたものだ。



講演会の締め括りは「登壇者と一般参加者との意見交換会」の予定であったが、識者の熱い報告が続いたことから時間が超過。予定を変更して、そのまま友愛山荘中庭での「交流会」となった。FIACS 会長・鳩山由紀夫氏 (元総理大臣) の講評・総括に続き、あちこちでの真剣なやり取りや談笑の音が晴天の夏空に高く響く中、今年も無事閉会。



昨年同様、講演会は区長・町議ほか地元識者に案内。また交流会ではメディア (FM 軽井沢、軽井沢新聞社、軽井沢ニュース社) からの登壇者ほか、各識者への取材・インタビュー・写真撮影が相次いだ。多くの町民、別荘民の関心の高いテーマであるだけに、より多くの方々の参加が望まれる内容であったと感じる。この点については「次回 (第5回) はさらに多くの財界人に集ってもらい盛大にやりたい」(FIACS 理事長・水野氏) との発言もあり、今後の展開に期待したい。



軽井沢書店

〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢 (大字) 1323 TEL.0267-41-1331 FAX.0267-41-1332
営業時間 9:00-21:00 (水曜定休) ※季節により営業時間が変更になる場合がございます。
夏期営業 7月21日(土) - 8月19日(日) 8:00-22:00

特集1 軽井沢の建築美



アートな建築がたたく軽井沢の森

軽井沢の別荘地を散策すると、鬱蒼とした樹々の奥に見え隠れする建築物が目にとまる。道路沿いであれば全容が見られるが、それは軽井沢別荘地のほんの一部に過ぎない。

戦後より、著名な建築家が設計をしてきた軽井沢の別荘には、今もその佇まいを残している物件はあるが、別荘ということで所在を明らかにしないため、著名な建築家の建物に気付くことはほとんどないだろう。

さて、自然を住空間で感じられる家、というのが軽井沢では好まれる。野原だった高原地に植林をした。やがてその樹々が、自然の日傘になり土地を覆った。その下に集った人々。鳥のさえずり、樹々のざわめき、リスも駆け行く。その様子をガラス窓やテラスで存分に楽しむ。こんな贅がここにはあるのだ。

今回、紹介する建築は、現代美と贅をふんだんにちりばめた一軒だ。建築に無駄がない。むしろ冷たいほど直線的なキューブである。だが、

それは外から見た時の印象であり、内から外へのアプローチがこの建築の本質を極めている。美しい陽光が差し込む軽井沢を、霧に包まれる軽井沢を、雪に溶け込む軽井沢を、あたかも大画面の高画質テレビジョンで観るかのような設計がなされている。近くに川が流れ、せせらぎの音も自然との共生を抱かせる。

静かに、ただ静かに時を楽しむ場所。軽井沢の空気を吸い込み、外を楽しむ建築に軽井沢の美を見た。



JUSANSOU (旧軽井沢)
設計 / 小杉浩久 プロップ・ポジション
撮影 / 島村陽一

特集2 アートの逸品

ショーウィンドウから視覚に映るアート作品

軽井沢を通る主要国道18号線を走っていたら離山通りと交差する信号で赤信号に止められた。西(小諸方面)に向かって停車した車窓からふと横を見ると、不動産会社のレンガ造り建物のショーウィンドウ越しに色彩が踊る力強い絵が目に入る。

誰の作品だろうとサインを見ていたところ、信号が青になった。気になるなあとハンドルを握りながら頭の中で、作品と作者を交錯させ考える、うーん。

そんなあるとき、キュレーターの友人が言った。「あの作品でしょ、あれは今井俊満だと思うよ。サインもそんな感じだし」。

今井俊満、1928年(昭和3年)生まれの洋画家で、東京藝大の派遣学生で学んだ後、1952年フランスへ私費留学。フランスではソルボンヌ大学で文学を専攻、この時期にサム・フランシスやミシェル・タピエと交流しアンフォルメル運動に参加した。日本では1962年現代日本美術展最優秀賞受賞、1979年紺綬褒章受章、1983年にはフランスのオフィシエ受章、1995年にレジオン・ド・ヌール勲章シュバリエ受章、1997年コマンドール受章と、数々の輝かしい受章(受賞)歴を誇る。

「私にとって重要なのは、絵画ではなく文化」と言い切った今井。文化論者で自由への思いが強かった

今井の作品は、日記を綴るようなものであったらしい。日本人としてのアンフォルメル実践こそが、文化の違いを具現していたのではないかと。

さて、今井を語ろうとすると一朝一夕では済まされないのが、この離山交差点横で静かにだが力強く色彩を放つ抽象画をご覧いただきたい。だが、信号が赤になったとき作品のガラス窓が真横に位置していることを願うばかりである。くれぐれも、信号への注意を怠りなきよう願います。

この今井作品が飾られているのは、別荘管理会社株式会社ワタベアンドカンパニーの本社事務所である。アートに関心のある社長が知人(上村康浩氏)から借りている作品と聞いた。ほかにも、事務所内には日本画家の安原成美の絵も掛けられている。広がれ——アートの世界。

*今井俊満 (いまい としみつ)
1928-2002



特集4 手にしたい読み物2冊

■其の貳

祖父
野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史

今や日本を代表する避暑地軽井沢だが、明治のはじめは荒涼たる野原だった。この原野を別荘地に変えた男、野澤源次郎の孫が計画の全貌を明かすべく、古地図を繙き、資料を集め調査しまとめた一冊。100年先を見据えて計画を練り、まさに思い通りの軽井沢になっていることに驚嘆する。どのようにして為しえたかをこの本は教えてくれる。

『祖父野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史』

著 / 岡村八寿子

発行 / 牧歌舎

3,000円(税別)



■其の参

追分流
歴史と風景のクロスロード
“追分”を楽しむ流儀。

中山道と北國街道の分かれの地、追分。軽井沢ではなく“追分”なのだ、この地の人は言う。文化人に愛された“油屋旅館”の廃業後、宿を守ろうとNPO法人油やプロジェクトを立ち上げ、アートイベントや古本市、宿の運営までこなしている。この油やプロジェクトが一昨年からはじめた「追分ビエンナーレ」の第2回開催年である今年、活動を報告する冊子「追分流」が発刊された。無料頒布であるため、書店にはない。信濃追分を愛してやまない編集人の心意気が読み取れる一冊だ。

『追分流』
信濃追分文化磁場油や
0267-31-6511
(お問い合わせください)

特集3 軽井沢文化協演

“BOOK CAFÉ”

今年、「書店のない街 軽井沢」に2店舗のブックカフェが誕生した。5月18日にオープンした一店舗目は、表にはでないがCCCの香りが充満する「軽井沢書店」。もう一店舗は、軽井沢ニューアートミュージアム1階に8月1日に開店したブックカフェだ。

軽井沢書店は、軽井沢に本屋を！という地元の声を受けて、CCCが立ち上げてくれたもの。一方、ニューアートミュージアムの書店展開は、敷居が高いといわれがちな美術館をおもてなしの場にしたいと、居心地重視でブックカフェにしたという。はからずも同時期に2店舗ができたわけだが、双方の店舗でじっくり観察してみると、軽井沢書店は別荘民とおぼしき人たちがゆったりお茶をしながら本を読んでいる。ミュージアムのほうは、旅行者が圧倒的に多い。

さて、この2店舗の棲み分け、どのようになっていくのでしょうか？



■ 軽井沢書店
9:00 ~ 21:00 (水曜定休)
0267-41-1331
軽井沢馬場から西へ徒歩10分



■ 軽井沢ニューアートミュージアム
ART BOOK CAFÉ
10:00 ~ 18:00
0267-46-8691
軽井沢馬場から北へ徒歩10分

東風 ~軽井沢に爽風が吹く~



「軽井沢風越学園」 理事長 本城 慎之介さん

2020年4月、軽井沢に東風が吹く。既成概念に因われがちな社会に、一石を投じることになるだろう計画だ。幼稚園と義務教育(小中学校)を同じ学びの場で成立させる学園。気づきや想いを大いに含んだ学園設立である。

この「軽井沢風越学園」計画を皆に投げかけたのは、設立準備財団理事長である本城慎之介さんその人。本城さんは2009年に軽井沢に移住し、野外保育・信州型自然保育の運営と保育に携わってきた。野外という「不安定」「不確定」「不便」な条件下において、自ら工夫をして遊びの関係性や、環境への対応を模索する幼い子どもたちを目の当たりにし、そこに立ち会ってきたことで「教

育のあり方」の多様性に確信を得たと語る。子どもを選びエリートをつくる教育の場ではなく、子どもが選び自らが考えて育まれる教育の場。

学園建設が進む用地は、南軽井沢エリアの別荘地。昨今の社会事情から鑑みると、幼稚園や学校建設に近隣住民が反対をするケースが散見されるが、軽井沢風越学園はどうなのだろう。

聴く者によっては騒音とも取れるチャイム・声などに加えて、夜間照明の問題や送迎のざわめきまで、就学施設建設には逆風が吹くことが多い。ところが、このような想定できる問題をしてまお、町民からは学園に賛同し理事長の本城さんに期待

する声が多く聞かれる。集会による近隣との対話、媒体を通じての考え方の共有など、本質に迫れば迫るほどに期待は高まるのである。

本城さんは、北海道の出身で東京の大学院在学中に「楽天」の創業に携わった。楽天がベンチャー立ち上げから20年あまりの現在、経済界で強い存在感を示す企業に成長しているのは誰もが認めるところだろう。その副社長職から30歳(2002年)で自ら離れた。楽天でのマネジメント経験は、社員がより良く生きられるための環境整備が経営者の役割ということだと知り、それを社会に置き換えたとき、教育の大切さを痛感したのだそうである。それまで頭の片隅にもなかった「教育」を知るため、一般公募していた横浜市立東山田中学校長に就いたのが2005年、現場と経営の視点で教育に取り組み続けてきた。



先にも述べたが、当学園は3歳から15歳という年齢の子どもが、垣根のない学び舎で、学びの本質を個々において得る過程の創造を意図している。そして“緩やかに関係する公教育のモデル”づくりを目指すという。自己主導の学び、協同の学び、探求の学び、を軸に「同じ」と「違う」を混ぜていく。ただ単に、型にはまった個性を埋没させる画一的な義務教育の在り方を否定するのではなく、過疎地域では当たり前に行われている学年の違う子どもが同じ教室で学ぶ状況の視点を変えた取り組み

ということなのではないか。気になっていた高校生の教育に関しては、「高校以上は好きにしたら良いと思っています」のだそうである。



学園が募集する子どもたちは、軽井沢や近隣の市町村在住の子どもたちだ。この学園設立で大切なことは、学園に近隣住民が自由に入ることができる場所を用意しコミュニティとなること。

その、新しい教育モデルを確立する場としての「軽井沢」については、保つべき豊かさと変えるべきものが時代とともに選択されていくと見ていて、本城さんは「軽井沢の魅力はバランスです」と語る。自然が人に近く、食も豊かな一方で、買物も不便なくでき、首都圏に近い観光地としても成り立っている。その自然と観光地のバランスを上手く保つことが大切なのではと。

子どもは大人を見て育っていく。無意識のなかで真似る。だからこそ憧れてもらえる大人、かっこいい大人になりたいと、ご自身のお子さんのことを尋ねたとき答えの中に混じった想い。

軽井沢を選んでくれたことが嬉しくなったひとときだった。

元楽天副社長という肩書きが折に触れ本城さんの枕詞になっているが、いずれ日本の教育を変えたと評される人になると確信している。

美術食官だより



① セゾン現代美術食官

網膜に記憶のミロジー

依田洋一朗 × 霜嶋奏美 × 畑山太志

2018年9月8日(土)

から

2018年11月25日(日)

10:00-17:00

② 軽井沢ニューアートミュージアム

「小松美和展~祈り~」

2018年9月2日(日)

から

2018年9月30日(日)

10:00-18:00

かるいざわ ONSEN-ART

軽井沢温泉アート・・・これは温泉に入っているお客様たちがアートであるという意?! 軽井沢には、塩壺温泉、千ヶ滝温泉、とんぼの湯、ゆうすげ温泉など、日帰りでも楽しめる温泉が多々ある。施設が整っていて大きい「とんぼの湯」などへ行くと、たいへん多くの裸に出会うわけだが、人間の身体ってというのは素晴らしく良くできているアートだと思う。男風呂、女風呂、どっちに入っているかは別として、湯船に浸かる人間、身体を洗う人間、露天で横たわり湯冷ましをする人間・・・絵になる。

温泉天国の軽井沢にまたひとつ日帰り温泉が増えた。浅間を望む南軽井沢発地の高台にできたリゾートホテル「ルグラン軽井沢」だ。「八風温泉」は日帰り客専用で他にも2つの内湯がある。

ルグラン軽井沢 八風温泉 10:00-22:00 お問い合わせ 0267-48-0099



音楽はアートだ



音楽もアートだ! 野外ライブで盛り上がりよう! 臨場感も音もガシガシ身体に取り込め~♪南軽井沢の別荘地レイクニュータウンで、9月に2回野外ライブが開催される。

「Sound in the Circle 2018」

レイクニュータウン野外ライブ 入場無料! 花や樹と音楽を楽しむ♪

■JAZZ&ROCKフェスティバル [OUT of MIND]

日時: 2018年9月8日(土) 14:00-16:30 (小雨決行)

場所: レイクニュータウン The Circle (管理事務所前芝生広場)

■笛とパーカッション [地球の声を聴く]

日時: 2018年9月15日(土) 15:00-16:30 (小雨決行)

場所: レイクニュータウン The Circle (管理事務所前芝生広場)

出演: 長屋和哉 音楽家・文筆家・大学教員 雲龍 笛奏者

須藤友丹の日常、 散歩と買い物袋とダンボール

“今更い美術シリーズ 1” 文・鈴木一史

●日本画家

私の知っている須藤友丹は、日本画家のはずであった。鮮明な色使いの岩絵の具の坩堝に潜む影形は大地を引き、森林として茂り、そこに動植物を育む。時に荒く、時に繊細な岩絵の具の微粒子は確かな物質感を有し、儂げな箔の輝きと相まって日本画特有の表情を醸し出す。須藤友丹の絵の表情は、喜怒哀楽が共有する一種の生命反応として雄々しく育ち、美術鑑賞というよりかは“自然観察”という言葉が相応しい。生々しくも流動的な感性を放つ。



須藤友丹《花日菜(はなびら)》
2016/岩絵具、箔、麻紙

●軽井沢の空気

さてさて、私はある日ある時ある場所で須藤からニンジンジュースを手渡された。彼女は買い物袋で、両手には膨らんだ白いビニールの買い物袋を下げていた。スーパーの帰り道だったのだろう。また別の日、薄暗い公園の駐車場で彼女と出会った。また別の日、彼女は塩沢湖の湖畔を歩いていた。たかはしびわと一緒だった。その後、彼女たちはガレットを食べたそうだ。私が見かける彼女の姿は常に自然体で、悠々と散歩し、刻々と時間を過ごしていた。肌で感じる軽井沢の空気、歩きながら見つめる風景、囲まれた自然、すれ違う人々、彼女の感覚にはどう捉えられ、彼女の瞳にはどのように映っているのだろうか。ダンボールの日記が物語る須藤友丹の日常は、作家の好奇心のかけらとして存在し、日常に潜む何気ない素材の探求と、美術のありふれた面白さを伝えてくれる。

●ダンボール

まずは、ダンボールであるということ。茶色く、波打つ真ん中の紙が左右の紙を支えている。わずかにできる空気の通り道は温もりを湛え、その立体構造は自らが傷つき潰れて



も中身を守ろうとする。柔らかい皮膚を持つ野菜を内包する箱になっていることが多い。特にこちらへんは田舎だから。あとは果実とか、ただただ見た目を気にする商品パッケージとか、時に子犬子猫、せめてもの温もりを君に、。

そのダンボール、実用性に重点が置かれ、美術的に不適切なようであり、しかし誰もが図画工作で使った経験がある程に身近なものである。色を塗り、形として組み立てる。それほど大事じゃないから失敗も気にならない。半立体の厚みのある紙は何にでもなれる。もはやダンボールなのかわからない超造形は建築、デザイン、ファッションと多岐にわたる分野で弄ばれている。

●ダンボールと美術

美術ではどうだろうか。日比野克彦はダンボールアートのパイオニアなんていうヘンテコな呼ばれ方をしている。しかし、彼の制作は美術を、作る描くという行為自体を日常と親密なラインに引き寄せた。それはあいまいな現代美術をコミュニケーションツールとして発揮させ、同時に哀れな姿のどうしようもない紙(ダンボール)を一流の美術材料へと導いた。無駄に凄みのあるダンボールだ。ロッカクアヤコは素手によるペインティングをダンボールに施す。有機的で疾走感のあるカラフルなペイントと、無機質なダンボールの余白を持つ不定形の画面が次々と引きちぎられる。軽快なPOPとして活躍するダンボール。そして忘れてはならないのがボクシングペインティングで前衛の時代に旋風を巻き起こした篠原有司男のダンボール彫刻である。72年代以降、ダンボールや廃材を樹脂で固めて作った大胆なオートバイ彫刻により、高貴で崇高なるこれまでの彫刻のイメージを破壊した。

ダンボールはその存在のチープさ、汎用性の高さと自由自在に変容を遂げる様から度々現代美術にも登場してくる。消費社会を比喻する、現代を象徴した物質として、また工作の時間に皆が慣れ親しんだ、最初期の美術との接点を思い起こさせる暖かな媒体として。その理由や価値観は人により様々だが、須藤友丹は今日もスーパーにダンボールをもらいに行く。

●日記

日記という表現形態は、その日その日の創造を模索させ、日々の蓄積は連続性を兼ね備えた一連の芸術表現として成長していく。個としてそれ自体でも完結され、また流れとなり成熟していくのだ。彼女にとってのダンボールは日常の範疇であり、日常の延長にあり、生活と制作に寄り添う。同じく制作と、それを取り巻く日常の中で得る全ての要素が彼女にとっての美術の材料なのだろう。きっかけはなんでもないのだ。



散歩道で幼い子どもを見かけたり、帰り道で犬を見かけたら自然とクロッキー帳がひらかれる。無意識な興味は純粹無垢な存在が持つ行動や表情に向けられ、出会いの時間と、その瞬間の仕草を切り取る。後にダンボールとなり、実際にハサミで切り取られていき、言葉通りの意味での絵日記となる。また、本を読んだり人との会話の中からの思いつき、ふと描きたくなったからという場合もあるのだそうだ。この限りなく作家個人の日常に寄り添った芸術表現は、本人曰くももとはドロイングのトレーニングとしてはじめたものだという。



●日常と散歩

日常で見つけたモチーフを形へと起こす作業。これは本来彼女が描く、日本画の抽象表現へと向けられた実験的な試みなのだろう。人の髪の毛や、動物の毛並み、皮膚の滑らかさや衣服の波打ちなど、本来一本の輪郭線で囲えるものではない。それを限りなくシンプルに、それでいて鮮明な形として残し切り取るのは、純粹な絵画表現では追えない線と形の抽出作業となる。ダンボールをハサミで切るなんて、さぞかし難儀なことだろう。不器用にこつこつと、それがハサミを持つ手に、いずれ筆を持つ時のために記憶されていく。この試みで培った独自の実験結果は、同じ日記のシリーズの中に、それと

もまた別の作品の中にじわじわと湧いてくるのかなという淡い期待感がある。



●採集

最後になるが、ある意味最も印象的だったのが、その展示方法であった。ダンボールの作品はそのひとつひとつが2-3本の虫ピンで固定される。作品に穴をあけるのではなく、平面としての形を利用し、壁面と平行に繋ぎ止められる。展示室内にまばらに突き立てられる虫ピンと、それにより固定される幾多の形の絵画が並ぶ展示室風景は何となく“昆虫採集”を彷彿させる。ファールが虫眼鏡片手に森に入り、色とりどりの蝶を追ったように。夏の日の少年たちが網を持ち、木に登り、かっこいい形の虫を探しまわったように。須藤友丹は買い物袋をぶらさげて、軽井沢の日常のなかで色や形を採集しているのだ。見つけたもの、捕えたものは形をなして展示室というケースに陳列される。はじめに、彼女の絵をみることを“自然観察”みたいであると例えたが、要するに彼女の美術とは、そういうことなのかもしれない。歩いて、ついでに探して、思い立ったら記録して、また歩いていく。そうして描かれた絵には、自然の息吹が感じられる。積み重ねられた創造物はこれからも植物の繁茂のように生い茂っていくのだろう。



須藤友丹 (すどう とも)

1964 東京都生まれ。
1988 早稲田大学第一文学部卒。
2007 多摩美術大学大学院修了。
創画会会友。
今日も軽井沢にいる。



◆編集後記◆

「カルイザワ芸術新聞」新創刊。ファッションも、食も、もちろん暮らしそのものにも、あらゆるライフシーンにアートが寄り添ってきている。政治や経済や行政を取り上げるつもりは全くない。でも暮らしそのものが、これらと密接につながっているし、そこでの営みにアートの存在があると、ほっこりする。街のどこかでふと出会う芸術性を見逃さないぞと、日々360度、ぐるぐる見回しながら歩いている。どうぞよろしくお祈りします。

(Shimazaki)

発行：一般社団法人 国際文化都市整備機構 (F I A C S) 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-13-11 co-lab 千駄ヶ谷 (株) エナジーラボ内
編集人：嶋崎 由紀子 デザイン：鈴木 一史